

< 前回への補足 >

補足 1

先週最後につきのようのにのべました。

では、問答ないし問答推論が、表現の意味の明示化に役立つ場合とはどのような場合だろうか。それは、つぎのような問答だと思われる。

「AがBの西にあるのならば、BはAの東にあるのだろうか？」「はい、そうです」

「雨がふるならば、道路がぬれるだろうか？」「はい、そうです」

「AがBの西にあり、かつ、BがCの西にあるとき、AはCの西にあるのだろうか？」「はい」

「もしxを水に入れるならば、xは水に溶けるのだろうか？」「はい、xは水に溶けます」

「どちらのヨットが、ケッチで、どちらのヨットが、ヨールですか？」「あっちがケッチで、こっちがヨールです」

これらは、日常生活でのありふれた問答である。ただし、これらの事実に関する問答は、同時に意味に関する問答でもある。それは、推論についても言えるだろう。事実に関する推論は、同時に意味に関する推論でもある。それゆえに、これらのありふれた問答や推論において、表現の意味が明示化されている。

# これを説明したいと思います。

クワインは論文「経験論の二つのドグマ」(原論文 1948)で「言明の真理性は、何らかの仕方で、言語的要因と事実的要因へと分析でいるという考え」を批判した。デイヴィッドソンもまた論文「概念枠という考えそのものについて」(原論文 1974)で信念の問題と意味の問題を区別できないことを指摘した。デイヴィッドソンの挙げる例で説明しよう<sup>2</sup>。二本マストのヨットには、ケッチとヨールの区別があるのだが、ケッチが搬送するのが見えたとき、友人が「見ろ、すてきなヨールだ」と言ったとき、意見の食い違いは、その友人には対象が私とは違った風に見えたせいなのかもしれないし、あるいは同じようにみていたが、ケッチとヨールについての理解が私と違っていただけなのかもしれない。デイヴィッドソンの挙げるこの例において、二人の意見の違いが、対象の見え方の違いによるのか、語の理解の違いによるのかを、判定することができない。J.L.オースティンもまた、論文「真理」(原論文 1950)において、「S という事実は S という真ある言明であるか、それともこの言明がそれについて真であるところのものであるか」と問うことは、ばかげた答えを生み出す恐れがあ

<sup>1</sup> クワイン『論理的観点から』飯田隆訳、勁草書房、p.62。ちなみに、クワインは論文「何があるのかについて」で「意味」を否定し、「同義性」概念で十分であると主張した。

<sup>2</sup> ドナルド・デイヴィッドソン『真理と解釈』野本和幸、植木哲也、金子洋之、高橋要訳、勁草書房、1991、p. 209。

る」といい、また「象」という語について「われわれはその語を定義するのか、それともその動物を定義するのか」という問いは無意味である」と指摘する。<sup>3</sup>

## 補足2 問いが対象の同一性を構成する

わたしたちは、問答によって探求をおこない、事柄が明らかにしようとする。当然、言語表現の意味に関しても、問答によって明らかにしようとするはずである(他に方法があるだろうか?)。したがって、疑問文や疑問詞の導入規則や除去規則、疑問文の上流推論や下流推論は、その他の文の意味を変化させてはならないだろう。なぜなら、なぜなら、何かを明らかにしようとしたとき、私たちはそれについて問うからである。知りたいことや、明らかにしたいことがあれば、「それは何か?」「それはどうなっているのか?」「それはどういうことか?」などの問いを立てる。こうした問いを立てることは、対象を変化させないはずである。もしこうした問いを立てること自体が、「それ」の指示対象や内容を変化させてしまうのだとすると、問うことは無効である。私たちは、対象を変化させてしまわないようにしつつ問うのだが、そうしなければ、問うことが無効になるからである。したがって、対象を変化させないことは、対象について何かを問うという行為の中に、意味論的に含意されている。

したがって、対象について問うことにおいて、対象の同一性や自立性が構成されているのだと言える。問うことが対象の同一性や自立性を構成していると考えないとしたら、問うことが対象を変化させていないこと証明するすべはない。つまり問答による探求は不可能になるだろう。

ブランドムは、真理性の伝達によって、推論の妥当性を定義するのではなく、よい推論が保存されている性質を真理性と定義するが、どのような論法で次のように言えるだろう。

文の意味を変えないことによって論理的語彙の良さを定義するのではなくて、論理的語彙の使用において保存されているものを文の意味として理解することもできる。

クワイン風に言えば、同義だと見なされる二つの表現において、共通のものが意味とみなされる。

## § 3 文の意味と発話のコミットメント

### 1 文の意味と発話の意味の区別

上に述べた事実と言語の区別の難しさを次の例で説明しよう。私たちが、「これはリンゴだ」という発話の真偽について、意見が一致しないとき、その不一致は、「リンゴ」の意味の理解が異なるためなのか、対象の見え方が異なるためなのか、判別できないことになる。これを判別するためには、相手と自分で「リンゴ」の意味の理解が同じであるかどうかを確認する必要があり、そのためには、問題の対象以外の様々なものについて、「それはリンゴですか?」と問うて「はい」「いいえ」の返答を得て、それらが自分の返答と同じになるかどうかを確認するしかないだろう。しかし、仮に問題のリンゴ以外の全ての対象については、意見が一致したとしても、最初の食い違いのケースに関して、そこでは「リンゴ」の意味を同じように理解しており、最初の意見の食い違いは、そ

<sup>3</sup> J.L.オースティン『オースティン哲学論文集』坂本百大監訳、勁草書房、p. 191。

のときの対象の見方が異なっていたのだとする保証はないのである。仮にそれ以外の全ての対象について意見が一致したとしても、「リンゴ」の理解も、それらの対象の見え方も一致しているのだとする保証はないからである。他の対象について意見が一致したのは、「リンゴ」の理解も、対象の見え方も異なっていたために偶然に答えが一致したのかもしれないからである。

ここでは、この主張を認めたとえで、そこから文の意味と発話の意味の区別ができないということが帰結するわけではないことを説明したい。この例の場合、意見の不一致が、「これはリンゴだ」という文の意味、つまり文脈に依存しないこの文の意味が異なるためなのか、この文の意味の理解は同じであるが、その文のこの文脈における発話の意味が異なるためなのか、もまた同じように判別できないだろう。確かに私たちは、発話の真偽についての意見の不一致がある時、それが文の意味の違いによるのか、発話の意味の違いによるのかを区別できないだろう。しかしその主張は、文の意味と発話の意味を区別できないということを直ちに意味するのではない。このことは、文の意味と発話の意味の区別を認めることと両立可能である。

では、文の意味と発話の意味はどのように区別できるだろうか。

(注:このような意見の違いは、実際には問答の違いにおいて明示化される。「それはリンゴですか?」という問いに「はい」と「いいえ」という異なる答えをする二人が、もし「リンゴ」の理解において異なっているのならば、「それはリンゴですか?」の意味が二人で異なっている。もし「リンゴ」の理解が同じならば、二人はこの問いを同じ辞書的な意味で理解している。ただし、「それ」の指示対象(ないしその見え方)が異なっている。意見の不一致は、問答において明示されるのだが、この意見の不一致が、問いの理解の不一致によるのか、問いに対する答えの不一致によるのか、を区別することは難しいように思われる。)

## 2 関数としての文の意味と発話の意味の差異

チョムスキーが指摘したように、私たちは新しい無限の文を作ることができる。それは、有限な語についての辞書的な意味の理解と、語を結合して有意味な文にする文法規則にもとづいて可能になるだろう。このような文の意味は、コードモデルで説明できるだろう。

しかし、「私」「これ」などの指示詞を含む文の意味は、カプランによる指示詞の説明のように、異なる文脈において異なる命題内容を持つが、指示詞以外のほとんどの表現も異なる文脈において異なる内容を持つ。たとえば「これはリンゴです」は、カレーのルーの素材を指して言う時、果樹園である木を指して言う時、セザンヌの静物画を指して言う時、などで異なる内容を持つ。したがって、文の意味とは、一種の関数であり、広い意味の発話の文脈を引数として、発話の意味を出力するものである。

私たちは、チョムスキーがいうように無限に多様な文を新しく作ることができるが、他方で、一つの文を多様な文脈において多様な意味で使用することができる。<sup>4</sup> 同一の文を異なる思考を伝え

---

<sup>4</sup> スペルベル&ウィルソンは、『関連性理論』において、伝達を説明する一つの一般的モデルというもの存在せず、コードモデルと推論モデルの二種類で説明する必要があるとし、発話の意味を説明するには、推論モデルが有効だと指摘する。ス

るのに利用できるのは、使用の文脈が異なることによってである。文脈と呼ばれるものは、ふつうは、話し手、聞き手、世界、時間、場所、などに限られるかもしれないが、ここでは、背景知識、先行する会話、なども含めて広い意味で理解しておきたい。例えば、先行する会話が変われば、発話の中の前方照応の先行詞は変化し、その指示対象も変化するので、先行する発話も含めて考えたい。

このように考える時、文の意味とは関数であり、それは広い意味の文脈を引数とし、発話の意味を値とする関数であるだろう。この場合、ある文を主張する発話は、文の意味にコミットするだけでなく、その文のその文脈での値である文の真理性や(真理値を持たない文の場合)適切性にもコミットすることになる。もし文が関数であるとすると、文はそれだけでは真理値を持ちえず、真理値を持ちうるのは発話であることにある。

ところで、私たちは第1章で、文の意味を推論役割として理解した。例えば、文 $p$ を理解することは、 $r, s \vdash p$ が、 $p$ の適切な上流推論であるかどうかを判別する能力をもつことだと述べた。このことは、文の意味を関数とみなすことと矛盾しない。 $p$ を理解することと、 $p$ を主張することは別のことである。それと同様に、 $r, s \vdash p$ が適切な推論であるということは、もし $r$ と $s$ が真ならば、 $p$ が真である、ということ認めるということであつた、 $r, s, p$ の真理値にはコミットしない。したがって、文の意味を関数とみなすことは、第1章での議論と整合的である。

次の2では、このような意味とコミットメントの区別が、問答関係においてすでに示されていることを説明する。

### 3 文の意味と発話のコミットメントの区別

関数としての文は、多くの文脈で発話され、これらの発話は互いに異なる意味を持つが、その差異は次のようなものだろう。

- 1、語や句の指示対象が異なる。例えば「これはリンゴです」の「これ」が指示する対象は、発話の文脈によって異なる。また「リンゴ」の「リンゴ」の意味も、文脈によって異なる。
- 2、焦点位置が異なる。「 $[これ]_F$ はリンゴです」と「これは $[リンゴ]_F$ です」の場合で異なる。
- 3、発話の含みが異なる。「これはリンゴです」が「あなたの好物を用意しましたから、食べてください」を意味する時と、「あなたの嫌いなものですから、食べなくてもよいです」を意味する時がある。
- 4、言語行為が異なる。「私はうそをつきません」は、記述である場合もあれば、約束である場合もある。「あなたは東京に住んでいます」を普通に発音すれば、記述であるが、語尾を挙げて発音すれば、質問になる。

---

ペルベルとウィルソンは、「ほとんどの文は無数の異なる思考を伝えるのに使われる可能性がある」<sup>4</sup>と指摘している。

## ミニレポート課題

### 1、同義語による意味の説明、

導入規則と除去規則による意味の説明

$A=B$  という定義から、 $A \vdash B$  ( $A$  の除去規則) と  $B \vdash A$  ( $A$  の導入規則) を作れる。同義語や定義による意味の説明は、導入規則と除去規則による意味の説明に還元できる。

いくつかの疑問詞の同義語を示すことができれば、挙げてください。

### 2、自由に、質問、反論、コメント、感想、要望を書いて下さい。